電車を走らせよう

電車開業式
第二話

oerxx

電車を走らせよう　一

　湯ノ津温泉人力車商会では、駅から温泉町へ、温泉町から駅へ、お客さんを、精一杯頑張って運んでいました。
だが週末ともなると、増える一方のお客さんを、朝から夜まで運んでも、運びきれない日も、出て来ました。
お客さんの中には止む負えず、一里半の道を歩く、人達出て来ました。

　旅館の中でも、人力車の都合で、早立ちするお客さんがいて、朝食を早く作らなければ、ならなくなる日もあり、また夜は夜で、駅まで何回も往復している、人力車に乗るのに、自分の番が来るまで待たされ、最後の人力車で到着する、お客さんもいる日もあって、その日は後片付けも遅くなり、お客さんが増えるに従い、だんだん多くなって来て、不満が出て来ました。

　旅館組合では、駅からと、駅までの、お客さんの輸送をなんとかしたいと、協議を重ねました。
いろいろ出た意見の中で、
　「駅から、温泉町まで、電車を走らせてはどうだろうか。」という話が出ました。
　「電車なら、運転士と車掌の二人だけで、小さな電車でも、一遍に二十人位は、運べるし、かかる時間も、人力車より早いから、どんなものだろうか。」と、するとこれを聞いていた他の人が、

「そりゃ、電車を走らせるのはいいけれど、誰が線路を敷いたり、するんだい。まさか我々でやろうってんじゃないだろうな。いくらかかるかわかってんのかい？」と尋ねました。会場は静かになってしまいました。

　しばらくすると、他の組合員のが、
「電灯会社に、敷いてもらおうや、同じ電気なんだから。」と、いいました。これを聞いて他の者も、

「それが、いいや。」と、いって、一同合意しました。後は、電灯会社へ、電車を敷いてもらうことを、頼みに行く人の、人選をしました。

　そして、今日は終わりだと言って、組合員が腰をあげると、いままで黙って、聞いていた組合長西村が、立ちあがって、両手を前に出して、腰を上げ始めた組合員を制して、
「マア待てよ。ここでみんなに頼みがあるんだが、いまここで、方法はともかく、駅からここまで、電車を敷くことは、決まったにっだ。そうだろ。」というと、これを聞いた、組合員は、みんなうなずきました。

「今日、いまここで決めたことは、俺達は、人力車の車夫たちから、仕事を取り上げてしまうことなのだ。」と西村がいうと、組合員の一人が、

「組合長。まだハッキリ決まったことじゃないんだ。まだ、金のことは、なにも決まってないんだ、どうなるかわからないんだよ。」
「そうかもしれないが、でも、みんなの頭の中は、金のことさえ、なんとかなれば、電車を走らせたいと、思っているんだろ。」
「ウン、そうだけど。」

「そこだよ。口に出さなくったって、顔に書いてあるんだ。車夫は、電車が走るようになったら、俺達はいらなくなるんだと、とってしまうよ。いまここで決まったこの話は、今日の夕方には、車夫の耳に入ってしまうよ。古くからいる車夫は、かっては、それぞれが、みんなの所に居た人達だ。
その人達に、電車が走り出したら、人力車はいらないよ。言えるかい。電車が走り出す前の日までは、人力車に走ってもらわなければ、ならないんだから。

そこで、みんなに相談なんだが、電車が、走り出したら、この組合であながたに、できる仕事を頼むから、前に日まで、安心して人力車を、引っ張ってくれと、俺は彼等にいいたいんだが、どうだろうか。彼等に約束したいんだが。」

聞いて組合員は、口々に、隣りの人たちと、話を始め、ザワザワしましたが、その中から一人が立ちあがって、

「組合長。わかりました。いままで世話になったんだ、彼等を路頭に迷わせたは、いけないや。みんなで彼等が、先々も、なんとかなるように、みんなで考えようや。どうだいみんな。」と、いうと。聞いていた人達は、一斉に拍手をしました。

西村は、立ちあがって、
「俺のいうことが、解ってもらえて、ありがとう。俺は噂が出る前に、人力車商会に行って、ここの旅館組合では、駅から電車を敷くことを、考えているが、電車が走り出したら、車夫達の仕事がなくなって、しまったときには、車夫達が出来る仕事を、組合で出すから、心配しないで、その日まで、車を引いてくれと、いって話して来るから。

　それと、電灯会社との話し合いで、うまく行ったら、いまの人力車商会を、電車の会社にしたいだが。これはまだ、俺一人の、考えにしておこうや。
　他になければ、解散しようや。」と言って、座りました。議長が、
「解散。」といい、寄り合いは終わり、西村は、早速人力車商会に行きました。

二

　数日後　組合長の西村は、代表に選ばれた、数人の温泉組合の幹部を連れて、電灯会社へ行きました。
　一行は社長室に通され、そこで社長花田に、
「省線の駅、湯ノ津から、自分達の温泉町まで、電車を走らせてもらえないか、」と頼みました。これを聞いた、花田は、

「電車を敷いてくれと、いわれても、同じ電気に違いないけれど、皆さんの旅館や、お住まいに電灯を送るのとわけが違います。我々が送っている電灯は、細い線が二本だけで済みますが、電車を動かすとなると、もっと太い線ががいります。変電所も造らなければならないし、線路も敷かなければならない、電車も買って来なければならない。そう簡単に出来るものじゃ、ありませんよ。皆さんが、これらを買うお金を、出して下さるなら、話は別ですが。」と、言われました。だが温泉組合の幹部はあきらめず、

「それでは、誰かここに、線路を敷いて電車を、動かしてくれるような人を、御存知ないですか。」と、尋ねました。
　花田は、しばらく黙っていましたが、
「心当りがあるから、聞いて、みましょう。」と、返事をしました。温泉組合の幹部達は、
「よろしく　お願します。」と言って、帰りました。

　幹部たちは、道々話しあいながら、
「まあ、資本を出してくれそうな人を、捜して下さると、おっしゃって下さっただけでも、来たかいがあったよ。」
「断られときは、もう駄目かと、思ったが、少しはなんとか、なりそうな気が、してきたが。」
「ただ、捜したが、誰もいませんでした、という答えが、返ってくるかも知れないが、」

「金さえあれば、他人に頼まずに、俺たちで出来るんだが。」
「線路や、駅の土地だけでも、準備しておこうや。寄付してもらうか、買うことするかは別として。」
「それと、大事なことは、人力車を、どうするかということだよ。　人力車のお客が、いなくなるのだから。」
「本当だ。大変ことを、忘れるところだった。これも考えなければな。」と、どうやら、これからの、方針が決まってきました。

電車を、走らせるように、なるか、ならないか、まだ全くわからないまま、いま出来る準備だけは、することにしました。

一方、電灯会社でも、話を聞いていた、専務山野は、社長花田に向かって、
「社長、悪い話じゃないですね。先の見込みがあるのなら、一口のっても、いいんじゃないんですか。」
「ウン、聞いてて、俺もそう思ったが、お金が沢山いる話だ。お金を出して、儲からなくてもいいから、出した分、位は返ってこないとね。」

「そりゃ、そうですけど、でも、あの温泉町湯ノ津は、大勢お客さんが、来ているそうですよ。」
「それは、俺も聞いている。それですまんが、電車を走らせるように、するのには、どのくらい金がいるのか、また電車を走らせたら、収益は、どのくらいあるのか、調べてくれないか。いざとなったら、他人に頼まず、うちでやるから、温泉組合に知られずに、彼等がどのくらい、負担できそうなのかも、コッソリ調べてくれないか。」と花田が言うと、山野は、
「承知しました。」と、言って社長室を、出て行きました。

温泉組合の幹部は、温泉町に帰ってくると、早速、組合員全員を集め、電灯会社での、社長との話した結果を伝え、
「電灯会社では、電車を敷く費用を出してくれる人を、捜してくれるので、電灯会社とは、引き続き話しあいをします。これには、数人の人に担当してもらいます。まだ具体的に、建設費については、誰がどの位負担するのか、何も決まっていませんが、決まってから、準備をしていたのでは、それだけ、遅くなって、しまいます。準備だけは、始めたいと思いますが、みなさん如何だしょうか？」と、話し始めました。

これを、聞いていた人達のなかから、
「電灯会社が、手をひいて、全額俺達で負担するのは、無理だということは、わかっているのだから、もしそうなったら、いま、決めても無駄なことに　なるんじゃないだろうか？」という、消極的な、意見がでました。

「いや、電灯会社にしたって、電車が走れば、電気が売れるんだから、やる気になるんじゃないだろうか、」と、電灯会社の専務みたいなことを、言う人もいるし、自分達が、負担する費用が、どのくらいになるのか、まるっきり解らないいま、また話が、まとまりませんでした。

みんなが、ああだ、こうだと、いっているのを、黙って聞いていた、西村が、
「例えば、お客さんが、乗り降りする、ホームだが、土を盛っただけのと、そのホームに雨の日のために、屋根を架けるとなれば、費用は違ってくる、もし電灯会社が、費用の負担を、断わって来たら、我々で出せる範囲のものを、造ろうじゃないか。ただ、俺達は、電気なんていうものは、素人なんだ。電灯会社には、金の話と、別に技術指導を、頼むつもりだが。この費用だけは、我々のほうから、キチント支払いたいと、思うが、みんなどうだろう。」と、いいました。

　これが、この日の、結論になって、二人の、準備委員が選出されました。

　準備委員会は、早速仕事を、始めました。この温泉町の旅館は、通りを挟んで両側に並んでいて、端から、端まで歩くと、十五分位かかりました。
　準備委員会は、まず、温泉町の駅の位置を決めました。温泉町のほぼ、中央に、一ヶ所としました。
これがもめたのでした。

　これを、組合の総会では発表すると、駅から来て、一番奥に旅館を持っている居る人は、
　「電車が奥まで来なければ、　電車から降りたお客てさんは、この温泉町は駅前だけだと思い、奥までやって来ないだろう、だから駅を奥に造れば、この温泉はここまで、あるんだかということが、解るんだ。だから駅は、一番奥に造らなければ、だめなんだ。」といい、

　温泉町の入口の近くに、旅館を、持っている人たちは、
　「電車で奥まで連れていかれたら、お客さんはここまで、戻ってこない。」といい、　また、
　「両端だけでは、歩く距離が長くなり、お客さんが気の毒だから、最初の考えの真ん中が、やはり一番いいんだ。」という意見も出て、ケンケン、ガクガク、ついには　大声から、いまにも手まで出そうになりました。

　大汗をかいて、やっと静かにした。準備委員は、
「この案は、撤回します。ここに町の、大きな地図を、出しておきますから、それぞれで、希望する駅の場所を、書き込んで下さい。ただこれは、あくまで参考ですから、決まったときに、駅の土地として買うか、寄付していただくかは、いまは決めませんから、これについては、了承して下さい。」といって、地図が書いてある大きい紙を、みんなの前に、拡げました。
　組合員それぞれが、自分が駅を望む場所に、太い筆と墨で、書きました。

　みんなが、書き終わると、それを見て、みんなが驚きました。
旅館街は、道を挟んで両側に、建物が並び、その後ろは、旅館の庭があり、後は田んぼや畑でした。
それが、全部墨で、塗りつぶされていたのでした。
しばらくは、みんな地図をみつめたまま、声が出ませんでした。

　ややしばらくしてから、このなかの一人が、
「鉄道の駅から、線路を敷いて来て、この町の、鉄道の駅と反対側の、端まで電車を、通すとな

ると、どこを通したら、いいんだい。道の真ん中なんぞは、狭くて通せないし、といって、裏を通したら、目障りだし、駅を町の真ん中に造るとなると、どうすりゃいいんだい。」と、いったので、またザワザワと、雑談が始まりました。

　これを聞いて、委員の一人前村が、立ちあがって、
「この町の、駅については、電車の線路を、通す場所も、関係してきますので、それと併せて、いまいただいた御意見も、参考にいたしまして、委員会で再度検討したいと、思っております。」と言って、温泉町の駅の位置については、通過する線路の、位置と共に、保留にしました。

　次に別の、委員田村が立つ上がって、
「次は、汽車の駅から、この町まで電車の線路をどこに敷くかについて、委員会で決めたことを、御報告いたします。そして、みなさんの、御意見を聞きたいと、思います。線路の為に土地を、買わなければなりません。また土地の状態が、電車を、走らせるのに、よくなければ、その手当もしなければ、なりません。沢山お金がいるか、そんなに、いらないか、重要な問題ですので、しばらく、私の話しを、聞いて下さい。」といって、正面の壁に別の地図を、拡げました。

「みなさんも、御存知のように、いま、省線の駅から人力車が、お客さんを乗せて走ってくる道は、狭くて、人力車がすれ違うのが、やっとのところ、ばかりです。
　ここに、電車を、通すとなると、道を広げなければなりません。それと、省線の駅が出来てから、駅に近い方からだんだんと、家が建ちはじめ、中には商店も出来ています。

　この道に、電車を通すとなると、道を拡げるために、土地を買うだけでなく、商店に、動いてもらう、ことにもなり、その費用も当然かかります。このため、いま人力車が通っている、道に電車を、通すことは、やめました。」と、いって、みんなの、顔を見渡しました。みんなも　黙って聞いていました。まだ話は、続きました。

「それで、私達委員は、この地図を前にして、いろいろ、省線の駅から、どのように、線路を敷けばよいか、話あいました。そして、使えそうな土地を、見つけることが出来ました。これを利用すれば、省線の駅から、この町までの、半分以上の距離は、なんとかなるんです。

　あと、足りないところは、　できるだけ、人家を避けて、畑や田んぼを、使いたいのです。

あと、まだ全く決まってないのが、省線の駅前です。あそこは、みなさん、御存知のように、駅の前が少し広くなっていますが、それを、囲むように、商店や、人家ができて、しまっているのです。私達の電車の駅は、省線の駅になるべく、近づけたいたいのですが、そうするには、何軒か、どいてもらわなければ、なりません。

　省線の駅前については、今後また、みなさんの、御意見を、伺うとつけたいうこにして、途中の線路について、もう少し話しまう。」と、大きく息をついて、また話を続けました。

四

「私達委員が、目につけた土地は、いま人力車が、走っている道とは、だいぶ離れています。その道の西側の畑や、田んぼの中に、なにも使われてない、砂利道みたいのが、北から、南に、一本あるんです。これは、じいさんたち聞くと、その昔、小さな川だったんだということを、じいさんたちの、じいさんに聞いたことがある、という、じいさんに出あいました。

それが、いつの頃からか、水が流れなくなり、自然に埋まってしまって、いまのようになって、しまったらしいのです。
そして、調べてみると、あの砂利道らしいところだけが、持ち主がわからないんです。」と、言って壁に、貼ってある地図に、筆で、砂利道を書き込みました。

この温泉町は、鉄道省の駅から南に、一里半ほどの、海に付き当ったところに、ありました。

旅館街は、海に突き当る手前で、西に曲がっていました、道はそのまま行くと、海岸で砂浜の中に、消えてしまっていました。
温泉で生活が出来るので、海があっても、漁師はほとんどいない、町でした。まだ話は、続きます。

「それで、役場に相談に行ったら、登記所へ行って、旅館組合でこの土地を登記しますが、異議のある人は、期間を決めて申し出て下さいという、掲示を出してもらうんだそうだ。そしてこの期間内に、申出がなければ、旅館組合の土地として、認められるそうです。
もし、地主さんがでてきたとしても、あんな土地だから、そんなに、高いことはいわないと、思いますが、みなさん如何ですか。あと、駅が、決まれば、この砂利道をどこから、どこまで使うことに、するだけですから。」と、話終わりました。

話終わると座り、前村が交代して、立ちあがり、

「途中の線路の件については、如何ですか。工事に一番時間が、かかるところですから。みなさんに、御異議がなければ、地主さんを、捜すことから、始めたいと思うのですけれども。」と言って、一座を見渡しました。
それを、聞いた一同は、拍手をして、答えました。

前村は、さらに続けて、
「さきほど、お話しました。省線の駅前のことですけれど、駅前が、御存知のような事情なので、これから駅前の人達と、話あってみますが、場所が、不本意なところしか、譲ってもらえないかと、思いますが、お金を、沢山出せば別でしょうが、これについては、無理を言わないように、して下さい。」と、言い、そして座りました。そして、
「みなさんの、ほうから、何かなければ、解散します。」といい、解散しました。

翌月、電灯会社から、電車の件で、話をしたいから、来てほしいと、連絡がありました。
西村が、委員の、前村と田村連れて、電灯会社へ行くと、社長室に通されました。　電灯会社の社長花田は、入って来た旅館組合の、人達が席に着くのを待って、話始めました。

「このたび、そちらから、お話のあった、省線の駅から、あなたがたの、温泉町まで、電車を走らせることについて、電灯会社としても、協力したいんだが、いかがですか、」と、いいました。
それを、聞いて、西村は、
「有難うございます。それでは、電灯会社さんで、線路を敷いて、私共に来るお客さんを、運んで下さると、いうことですか？」

「イヤ、そうは言ってないよ。電車を走らせるのに、必要な資金、資本金を一部負担しようということだ。
それと、工事は一切やらせてもらうよ。　電車を買うのもの、つてを頼って捜すし、運転士や、電車の修理工も、いま実際に走っている、電車会社に頼んで教育してもらうし、線路が出来て、電車が来て、電車が、走ることができるようになったら、実地に指導に来てもらうように、頼むから。

もちろん、電車を走らせるための、電気は供給させてもらうよ。」と、話しました。

もう、すぐにでも、工事が始まって、明日にでも、電車が、走り出しそうな話でした。旅館組合の、一行は、電灯会社が、もうここまで考えていたのかと、　ビックリしてしばらく声が出ませんでした。

やや、しばらくして、われに返った西村が、
「もうそこまで考えて下さっていたとは、驚きました。本当に、有難うございます。つきまし

ては、資本金はどの位負担して、いただけるのでしょうか？」

「最高で四割までだ。もともと、あなたがたの電車なんだ。だが全額あなたがたでは、無理だから先日頼みに、いらしたと、思うのだが、」
「その通りです。」
「それで、電灯会社としては、あなたがたも、お客さんだ。お客さんが困っているときに、知らん顔もできないから、少しは力になろうと、思っただけだ。それだから、電車が走りだしたら、十年以内に、電灯会社が、負担した分を、取り崩しで、完全にあなたがたの、電車にしてほしいんだが、どうだろう。」

「そこまで、お考え下さいまして、有難うございます。」
「大丈夫かい。出来るかい。」
「大丈夫です。出来ます。私達のところにお出でになる、お客さんは年々増えております。電車が走るようになったら、私達は努力して、もっとお客さんを、増やそうと思っています。」
「ぜひ、そうしてほしいね。」と、花田はいい、西村は、
「本日、お聞かせ下さいました、お話は、持ち帰りまして、全組合員とも相談し、早急に返事をいたします。本日は、誠に有難うございました。」と、言って、一同を連れて、電灯会社を、出ました。

帰り道で、委員の一人田村が、西村に向かって、
「組合長、電灯会社は、金を出すと言っているが、電車を走らせるのに、必要なことは、自分の方で、やりたいといっているが、そうすると電車が走り出す前に、自分のところで出した、金は、全部とはいわないもでも、ある程度回収することが、できてしまう。うまいことを、考えたものだなあ、」と、話しました。これを、聞いて組合長は、

「ウン、俺もそう思ったが、だがこれを断れば、電灯会社から、金は出ないよ。俺達がどんなに、がんばったても、俺達の金だけでは、電車は、走らせられないだから。それに、俺達は線路を敷いてくれる会社や、電車を造っている会社も、知らないし、だから、ここは、電灯会社を、頼りするのも、やむおえないと、思うよ。

明日にでも、みんなに集まってもらって、意見を聞けば、もしかすると、中には、線路を敷いたり、電車を造っている会社を、知っている者が、いるかもしれないから。
今日は、疲れたよ。ここで別れよう。」といって、自宅のほうへあるいて行きました。

翌日の、午後、集まった組合員に、昨日西村と、電灯会社へ一緒に、行った委員の一人田村が、立ち上がって、電灯会社の社長が話したことを、伝えました。それを聞いた組合員は、ここまで話が、進んでいるのかと、ビックリして声が出ませんでした。

次に、西村が立って、
「電灯会社は、電車が走り出すまでのこと、土地のこと、駅や、線路のことだが、これ関係する工事は、全てまかして、欲しいということだ。みんなは、これでよいか、どうか、また他にお願出来る会社が、あれば、次の総会までに考えてきて、欲しいんだ。」と、一座を見渡して座りました。

今度は、前村が交代して、
「みなさんが、一番気にしている、電車会社をつくる、資本金のことですが。先程お話しましたように、電灯会社が四割までは、負担して下さるので、温泉組合の負担額も決まり、その平均の負担額も決まりましたので、お話いたします。」と言って、その金額が書いてある大きな紙を、正面の壁に貼りました。

西村が、代わって、

「この、資本金については、いますぐに、現金が必要ではない。ただみんながどの位、出せるかだけを知りたいんだ。みんなが出してくれる額を、合計してそれが、旅館組合の負担分を、超えれば問題ないんだが、足りない場合はどうするか、考えなければ、いけないから、
俺は、この湯ノ津に住んでいる人だったら、この旅館組合員だなくても、いいと思っているんだが。」

今度は田村に、代わって、
「今日は、電灯会社との、話し合いの結果の、報告と、皆さんに出資していただく、金額を、報告ということで、これらを、すぐに、返事をして下さいとはいいません。大事なことですから、来週の総会に、みなさんの、御意見を、聞かせていただきます。準備委員会では、そのときまでに、駅の位置や、線路の位置など、委員会で決めたことを、報告いたしますから。　今日はこれで、解散します。」と、いって、話は、終わりました。

翌週また、旅館組合の総会が、開かれました。田村が、立ち上がって、
「まず、先週、お話しました。電灯会社に、電車開通までの、仕事のうち工事は、お願する件ですが、何か御意見のある方は、お出でですか。」と、言って、一座を見渡しましたが。誰もなにもいいませんでした。それを見て、田村が、

「御意見が無いようなので、電灯会社の、お申し出での通りに、お願することにします。
次に、みなさんに、御負担願う、資本金のことですが、本日から、一週間の間にそれぞれ、御負担いただける、金額を、個別に、紙に書いて、判を押して持ってきて下さい。それを、集計して、不足が出た場合どうするか、みなさんの、御意見を、伺います。　また、多かった分については、電灯会社の意向も、聞いてみます。」と、いって座りました。

次に、別に前村が立って、
「まず、この温泉町に造る駅を、この町のどこに造るか、ということですが、先日、みなさんの、御希望なさる場所を、地図に書いていただいたところ、この町が、駅だらけに、なってしまいました。
そのとき、いただいた御意見で、町の中の道を拡げるのは、無理だから、町の裏を、通したら、どうだろうかと、いう、御意見が、ありました。

ところが、これに対して、宿の裏は庭になっているので、一風呂浴びて庭を眺めて、気分よくして、おいでになる、お客さんの目の前を、電車が、走るのは、どうかなという、御意見も、ありました。
それで、駅は、省線の駅に近いほうの、町外れに、造ることに決めました。どうしても、みな

さんの、御意見を尊重すると、奥まで線路を持って来る方法も、線路を通す場所も、見つからなかったのです。

　なお、この駅の脇に、車庫と変電所も造ります。これらは、あまり目立たないように、廻りに木でも、植えるつもりです。
　駅から各旅館までは、お客さんが、望むなら人力車で、送り迎えをしたいと、考えています。と、言って、言葉を切り、一座を、見渡しました。
　人力車問題も、解決しました。まだ、話は、続きます。

　さらに、前村の話は、続きます。
「続いて、駅までの線路の件ですが、持ち主が、見つかりました。

　結論から、先にいいます。好きなだけ、譲ってくれるそうです。値段もこちらの言い値でいいと、おっしゃっていました。　組合としましては、端から端まで全部買おうと、考えております。そして、線路として、使わないところの使い方については、今後考えたいと、思っています。

　ただ、この砂利道を使うと、省線の駅まで、やや遠回りになります。その分、線路や電線の長さや、電柱の数が、増えると、思います。」さらに続けて、

「次に省線の駅の前に造る、私達の電車の駅ですが、いままで駅前に住んでいる方々を、一軒々々尋ねていって、お話をしたんですが、いい返事は、もらえませんでした。先程お話した、砂利道が、汽車の線路と、ぶつかっているところは、汽車の駅からは、だいぶ離れているので、どこかで、線路は、東に向きを変えなければ、なりません。

　その、場所が、汽車の駅前に造る、電車の駅の位置によって、変わってくると、思います。
　電車の駅が一番、東に寄ったと仮定して、線路を曲げなければならない、だろうと思われるところ、まではこちらから工事を、始めたいと思います。

　省線の、駅前に造る、電車の駅の位置については、そこに住んでいる方々と、再度話あって、その結果案を作って、後日また御相談したいと、思います。

　それで、この町に造る駅の場所と、汽車の駅まで、線路を敷く土地のことについて、みなさんの御意見を、お伺いしたいと、思いますが、いかがでしょうか。」と、言って、一座を見渡しました。

　誰も、なにも言いませんでした。前村は今度は座ったままで、
「それでは、みなさんこれで、よろしいということですね。」と、念を、押すと、みんな拍手を、しました。拍手が鳴りやむのを、待って、西村は、立ち上がり、

「今日決まったことは、明日にでも、電灯会社へ行って、社長に、話して来るよ。工事が始まると、何かと忙しくなるから、準備委員とは、別に、実行委員を、何人か決める必要があるな。
　準備委員は、今日残った、汽車の駅前に造る、電車の駅の、場所を決めてもらう、必要があるから、引き続きよろしく頼むよ。

　それと、みんな、心配していた、お金のことだが、組合員だけでは、足りなかったんだ。だがこの町の人で、何人の人達か出してもいいという人達が、出て来て、旅館組合の負担分は、全額出すことが出来るようになったんだ。
　これも、社長に話して来るよ。」

　翌月、日を選んで、温泉町の駅の予定地で、起工式が、行われました。
　旅館組合からは、組合長西村を始め、組合員全員が、参加し、
　電灯会社からは、社長花田以下、専務山野を始め、工事関係者が、出席しました。

　翌日からは、土木会社は、線路を敷く準備を始め、建築会社は、駅を建て始め、電灯会社は、電気を送るための、電柱を、運び込みました。

　この、湯ノ津を中心に、思ってもいなかったことが起きました、それは人の行き来が多くなり、人力車が、忙しくなったことでした。
　難航していいた、汽車の駅前の土地も、売ってくれる人が出て来て、なんとか解決しました。
　ただ、狭いので、小さな待合室と、線路とホームが、一本づつしか、造れませんでした。

電車を走らせよう

http://p.booklog.jp/book/29661

著者 : oerxx
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/oxdream/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/29661

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/29661

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.